

コト的な内容をもつ名詞の意味の変化*

杉浦 滋子

キーワード：日本語、指示、コト的な内容、名詞述語文

要旨

日本語でモノを指示する名詞とコト的な内容をもつ名詞の統語的な振る舞いを名詞述語文において比較した。コト的な内容をもつ名詞にもモノを指示する名詞と同じように指定文と措定文が存在すること、コト的な内容をもつ名詞がモダリティ的意味をもつ形式、文副詞的な意味をもつ形式、感情・感覚を表す形容詞へと変化することを指摘した。

1. モノを指示する名詞とコト的な内容をもつ名詞

「学生」「責任者」「加藤さん」のような名詞と「事実」「目的」「特徴」のような名詞には明らかに違いがある。直観的に言うと前者は（人を含む）モノを指示し、後者はコト的な内容をもつ。形式面では「という」を介した節による名詞修飾に違いが表れる。前者では節による(1a-c)のような直接修飾と(2a-c)のような「という」を介した場合を比較すると、(2)の「という」は伝聞の解釈をもつ。それに対し、後者では(3a-c)のような「という」を介した節を用いた修飾は内容の表現となり、「という」には伝聞の解釈はない（寺村 1992）。

(1)a. 来月表彰される学生

b. 執行部が指名した責任者

c. ドイツに留学している加藤さん

(2)a. 来月表彰されるという学生

b. 執行部が指名したという責任者

c. ドイツに留学しているという加藤さん

* 本稿の分析には国立国語研究所『日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いている。また、例文の後に出典を示したものは BCCWJ からの例文である。

- (3)a. 症状が悪化したという事実
- b. 優勝するという目的
- c. 本屋が多いという特徴

コト的な内容をもつ名詞が節に直接修飾をされることはもちろん可能であり、この場合には内容の表現ではなく、(1a-c)同様、寺村のいう内の関係となる。

- (4)a. 彼女が明らかにした事実
- b. 達成不可能となった目的
- c. 誰も気づかなかった特徴

ところで、コト的な内容をもつ名詞は伝聞を表さない「という」と共起するが、(5a-b)のように名詞によっては内容の表現が「という」を介さない形で見られる。

- (5)a. ペットを飼わない条件で入居を許可した。
- b. 転売する前提で購入した。

寺村は「トイウ介在必要」「トイウ介在任意」「トイウ介在不可」の三とおりのパターンがあると指摘し、節の陳述度、コト的な内容をもつ名詞の性質、コト的な内容をもつ名詞の主節の述語の性質を要因として挙げているが、コト的な内容を表現する別の形式がある。次のような名詞述語文の形である。(3a-c)で「という」を介在して名詞を修飾する節が(6a-c)ではノ・コトによって名詞化されて主語となっており、コト的な内容をもつ名詞は述語となっている。

- (6)a. 症状が悪化した {の／こと} は事実だ。
- b. 優勝する {の／こと} が目的だ。
- c. 本屋が多い {の／こと} が特徴だ。

本稿では(6a-c)のように、コト的な内容をもつ名詞が「という」を伴わない形名詞述語文の項となっている文をモノを指示する名詞と比較して考察する。

このような方針をとると伝聞ではない「という」と共起する名詞でも対象外となるものがある。(7a-b)で見ると「話」「噂」は伝聞を表さない「という」と共起するが、「事実」「目的」「特徴」とは異なり、(8a-b)のように内容が主語として現れる名詞述語文の述語とならない。発話・思考に関係する名詞にはこのようなものが多い¹が、上述し

¹ 寺村は発話に関係する名詞には「という」が必須であり、思考に関係する名詞も同様に

たように本稿ではこのような名詞は考察の対象から外す。

(7)a. 正直者が馬鹿を見るという話

b. 外資系の会社を買収されるという噂

(8)a. ×正直者が馬鹿を見る {の／こと} が話だ。

b. ×外資系の会社を買収される {の／こと} が噂だ。²

第二節でモノを指示する名詞に関する名詞述語文の先行研究を概観し、措定文に集合に属することを表すものと属性・性質を表すものの二種を認めるべきと主張する。第三節ではコト的な内容をもつ名詞がモノを指示する名詞と同じように指定文・措定文に現れること、モノを指示する名詞が起こさない変化を起こすことを指摘する。

2. 名詞述語文におけるモノを指示する名詞

名詞述語文についての研究を概観する前に、用語について整理しておこう。形態論のレベルの要素と統語論のレベルの要素を区別することが必要なので、「名詞」は形態論のレベルの用語として用い、統語論のレベルの要素を（一語であるなしに関わらず）「名詞句」と呼ぶこととする。つまり生成文法の用語に倣う。

名詞句には指示的名詞句と非指示的名詞句とがある（Donnellan 1966、西山 2003）。指示的名詞句とは言語外の世界の個体を指示するもので、非指示的名詞句はそのような指示をしないものである。指示的名詞句は、当該の個体を指示する別の名詞句で置き換えても文の意味は変わらない。それに対し、非指示的名詞句はそのような置き換えができない。(9a)の「日本の首相」は指示的名詞句であり(9b)の「日本の首相」は非指示的名詞句である。(9a)の「日本の首相」は(10a)のように「安倍晋三」に置き換えをしても文の意味が変わらない³が、(9b)の「日本の首相」を(10b)のように置き換えると文の意味は変わる。(9c)の「日本人」も個体を指示しているが(10c)の「日本人」は非指示的名詞句である。

(9)a. 日本の首相がスピーチをした。

考えるべきとする。「という」との共起が必須である語彙項目が(8)の形式をとらないことについては今後の課題としたい。

² 「噂」が述語となって許容される(i)のような文もあるが、(i)では「という」が必須であり、また単に噂のコトの内容を述べるのではなく「真実ではない」という意味があるので、異なるものである。

(i) 外資系の会社を買収されるというのは（単なる）噂だ。

³ もちろん安倍晋三が日本の首相という位置にある時点における発話という条件がつく。

- b. 彼は日本の首相になった。
 - c. 彼女は隣室の日本人に挨拶した。
- (10)a. 安倍晋三がスピーチをした。
- b. 彼は安倍晋三になった。
 - c. 彼女は日本人だ。

指示的名詞句と非指示的名詞句の違いが何らかの形で形式の選択に関わる言語もある。ドイツ語では名詞が指示的に用いられる場合には必ず(11a)のように定または不定の冠詞が必要だが、(11b)では冠詞を伴わない。(11b)の述語に現れる名詞句は(10c)と同様非指示的名詞句である⁴。

- (11)a. Ein/Der Student kam zu mir. (「ある学生／その学生が私に会いに来た」)
- b. Er ist Student. (「彼は学生だ」)

タイ語では(12)のような文において主語が指示的名詞句である場合には *pen*、非指示的名詞句である場合には *khuu* と、異なるコピュラが用いられる。

- (12)a. *dóoktêə súcháat pen àthíkaanbòodii khǎw mahāawíthayaalay thammasàat*
 スチャート博士 COP 学長 大学 タンマサート
 「スチャート博士はタンマサート大学の校長だ。」
- b. *àthíkaanbòodii khǎw mahāawíthayaalay thammasàat khuu dóoktêə súcháat*
 学長 大学 タンマサート COP スチャート博士
 「タンマサート大学の校長はスチャート博士だ。」

ドイツ語と同じゲルマン語派の英語ではドイツ語と異なり、(13b)のように非指示的に用いられた名詞が不定である場合にも不定冠詞が必要であり、指示的に用いられた不定名詞句と基本的に同形だが、非指示的名詞句においてのみ観察できる現象もある。

- (13)a. A/The student came to see me.
 「学生が訪ねて来た。」
- b. He is a student.
 「彼は学生だ。」

ひとつには、語彙項目によっては非指示的名詞句である場合冠詞が表れない。*head*「長」、

⁴ ただし、形容詞で修飾を受ける場合は冠詞が必要である。
 (i) Er ist ein guter Student. (「彼はよい学生だ」)

dean 「学部長」、captain 「主将」などが例である。

(14)a. She is head of the Sociology department.

「彼女は社会学科の長だ。」

b. He is dean of Humanities.

「彼は人文学部長だ。」

c. She made captain this season.

「彼女は今季主将になった。」

また、英語では指示的名詞句であれば所有代名詞を含む限定詞が定冠詞と同じように名詞を定とする。そのためその名詞句の指示する個体は談話の中で特定できる。例えば(15a)の *your friend* はある個体のみを指示する。しかし、*your friend* が述語にある場合、定ではない解釈がある。この場合意味の上でも違って、日本語で言えば「友達」ではなく「味方」という意味となる。これは非指示的名詞句として捉えられるもので、所有代名詞を伴うが定ではない解釈を受ける点が指示的名詞句と異なる。

(15)a. Your friend called.

「あなたの友達から電話があったよ。」

b. I'm your friend.

「私はあなたの味方だよ。」⁵

名詞述語文の主要な二つのタイプは指定文と措定文とされる。その二つを西山(2003)は次のように特徴づける。指定文はひとつの非指示的名詞とひとつの指示的名詞句から成り、「非指示的名詞句が表す役割にあるのはどの個体か」を探すと指示的名詞句によって指示される個体であることを表現する。日本語の指定文には正順の指定文(16a)と倒置指定文(16b)があり、認知的な意味は同じである。(16a)と(16b)はどちらも「責任者」という役割にあるのは「田中さん」だと述べている。

⁵ Declerck(1988)は次の例を挙げ、(ia)は指定文で *your friend* は変項（つまり非指示的）、(ib)は同定文(descriptionally-identifying sentence)で *your friend* は *strongly referring*（つまり指示的）としている。しかし、(ia)はすでに聞き手が *my friend* として言及した文脈での発話としているので(15b)とは異なる。

(i)a. (Who is your friend?) -It is the son of the Prime Minister.

b. (Who is your friend?) -He is the son of the Prime Minister.

(ia)、(ib)の疑問文を日本語で表現するとそれぞれ(ia)、(iib)のようになる。

(ii)a. (さっき話に出た) あなたの友達って誰？

b. (あそこにいる) あなたの友達はどういう人？

- (16)a. 田中さんが責任者です。
 b. 責任者は田中さんです。

措定文もひとつの指示的名詞句とひとつの非指示的名詞から成る。西山は措定文は指示的名詞句の属性・性質を非指示的名詞が表すとし、例として次のものを挙げている。

- (17)a. モーツァルトは天才だ。
 b. 鯨は哺乳動物だ。

これは(16b)の倒置指定文と同じ形式をもつが、同じ認知的意味を表す正順指定文の形式にはできない。

- (18)a. ×天才がモーツァルトだ。
 b. ×哺乳動物が鯨だ。

これら日本語の指定文と措定文を図式化すると次のようになる。

- (19)a. 正順指定文：[指示的名詞句] が [非指示的名詞句] だ。(16a)
 b. 倒置指定文：[非指示的名詞句] は [指示的名詞句] だ。(16b)
 c. 措定文：[指示的名詞句] は [非指示的名詞句] だ。(17a,b)

主要なタイプである指定文と措定文にその他のものも加え、西山(2003)は日本語の「AはBだ」「BがAだ」は次のように分類できるとする。

| | 「AはBだ」 | 「BがAだ」 |
|---|-----------------------------|------------------------|
| 1 | 措定文 「あいつは金持ちだ」 ⁶ | |
| 2 | 倒置指定文 「幹事は田中だ」 | 指定文 「田中が幹事だ」 |
| 3 | 倒置同定文 「こいつは山田村長の次男だ」 | 同定文 「山田村長の次男がこいつだ」 |
| 4 | 倒置同一性文 「ジキル博士はハイド氏だ」 | 同一性文 「ハイド氏がジキル博士だ」 |
| 5 | 定義文 「眼科医(と)は目のお医者さんのことだ」 | |
| 6 | | 提示文 「特におすすめなのがこのワインです」 |

⁶ 措定文の例文のみ西山の例を違うもので置き換えた。

同定文とは Declerck(1988)の *descriptively-identifying sentence* で「『Aはいったい何者か』という問いに対する答えを提供するもの」(p.174)であり、同一性文は二つの異なる指示的名詞句が指示する個体が同一であることを表す。この分類を受け入れると、「AはBだ」の形式の文でBが非指示的名詞句である場合は定義文でなければすべて措定文ということになる。しかし、措定文には明確に性質の違うものが存在する。(20)(21)で見るように「天才」「哺乳動物」いずれも指示的にも非指示的にも用いることができる⁷。しかし、(22)で見るように「天才」には形態的に関連のある形容詞「天才的」があり、(21a)は(22a)とほぼ同じ意味だが、「哺乳動物」にはそのような関連のある形容詞がない。

(20)a. おや、天才がまた何か始めたようだ。

b. 大型の哺乳動物が数頭見えた。

(21)a. モーツァルトは天才だ。

b. 鯨は哺乳動物だ。

(22)a. モーツァルトは天才的だ。

b. ×鯨は哺乳動物的だ。

形態的に関連のある形容詞とほぼ同じ意味を表すということは、ある性質・属性をもっているという解釈できるということであろう。つまり、ある個体が「(天才的であるという)ある性質をもっていること」と「(哺乳動物のような)ある集合に属すること」を区別しなければならない。論理学ではある性質をもっていることをある集合に属することとして表現するが、自然言語では別と考えるべきである。直観的に言って(21b)は「鯨」という要素が「哺乳動物」という集合の一要素であることを表すが、(21a)は「モーツァルト」がある性質をもつことを表す。措定文の中でこの二つのタイプを区別した場合、どちらが派生したものと考えられるだろうか。述語に現れる名詞が性質・属性を表すようになる(形容詞と同じ性質をもつようになる)には、(23)の文からの再分析があると考えられる。つまり、集合に属することを表すタイプを元にして属性・性質を表すタイプが派生すると考えられる。

(23)a. [指示的名詞句(要素)] は [集合]

b. $a \in M$ ⁸

⁷ ただし「哺乳動物」のような名詞は専門用語であり、日常言語としての表現価値が低い。そのため(20a)のように指示的名詞句として用いられることは少ない。

⁸ この集合自体は指示的名詞句によって表される。しかし述語として用いられたときは集合全体を表しているわけではなく、非指示的である。それは数を義務的に表示する言語において主語と一致することからも見てとれる。

このように集合に属することを表す措定文⁹と性質・属性を表す措定文を区別する必要がある。「天才」は集合の共通項そのものが性質・属性であるが、名詞の中には集合の定義的共通項以外の性質・属性に表現価値があるものもある。例えばある地域出身者にそれ以外の共通の性質があるとみなされることは多い。(24a)(24b)はどちらも同じ「日本人」を述語とする文だが、(24a)では「彼」が「日本人」という集合の要素であることを述べている。それに対し(24b)では「彼」が「日本人という集合がもつと一般的に見なされる属性・性質（例えば個人より集団を優先する、勤勉であるなど）をもっている」ことを表す。つまり(24a)はある集合に属することを述べており、(24b)はその集合の定義的共通項以外の性質・属性を有することを述べている。

(24)a. (パスポートを確認した。) 彼は日本人だ。

b. 彼はよくも悪くも日本人だ。

(24b)では「彼」はその集合の要素でもあるが、(25)では「彼女」は「日本人」という集合の要素ではないが「日本人という集合がもつと一般的に見なされる属性・性質」をもつことを表している。ただし、「日本人という集合に属しておらず、日本人という集合がもつと一般的に見なされる属性・性質をもつ」という解釈は「日本人より」という比較の表現がある場合に限られる。

(25) 彼女は日本人より日本人だ。

このような比較の表現がなくとも「その集合に属していないがその集合がもつと一般的に見なされる属性・性質をもつ」という解釈が成り立つ場合には形容詞として成立しているとみてよい。「大人」「子供」などはそういった例である。

(26)a. あの子は大人だね。

b. あいつは子供だなあ。

ここで指定文に現れる非指示的名詞句について指摘しておくべき点がある。(27)の「責任者」、西山の例文の「幹事」は非指示的名詞句としては役割を表すが、このような名詞が指定文に現れる場合には「何かの責任者」「何かの幹事」という形でしか現れない。この「何か」をパラメーター名詞句と呼ぶが、指定文に現れる場合にはこれは必ず指示的名詞句である。そうでなければ個体を指定できないからである。そして、次のように、パラメーター名詞句を主題として「取り出した」言い換えができることが観察され

⁹ 措定文と異なる分類を設けることも考えられるが本稿では措定文として扱う。

る¹⁰。図示すると(29)のようになる。

- (27)a. 田中さんがこのプロジェクトの責任者だ。／このプロジェクトの責任者は田中さんだ。
b. このプロジェクトは田中さんが責任者だ。
- (28)a. あいつがこの事件の犯人だ。／この事件の犯人はあいつだ。
b. この事件はあいつが犯人だ。
- (29) aが[bのc]だ。／[bのc]はaだ。
→ bは[aがc]だ。

以上をまとめると、日本語のモノを指示する名詞には次の性質がある。

- (30)a. 指示的名詞句としても非指示的名詞句としても用いられる¹¹。非指示的名詞句として用いられて性質・属性を表す場合があり、形容詞として認められるべきものもある。
b. 指定文において(16a)あるいは(16b)の形式をとる。
c. 指定文において(29)の言い換えができる場合がある。
d. 措定文において(17)の形式をとる。措定文には集合に属することを表す文と性質・属性を有することを表す文がある。

3. 名詞述語文におけるコト的な内容をもつ名詞

3.1 モノを指示する名詞との共通点

ここからコト的な内容をもつ名詞の振る舞いがモノを指示する名詞のもつ(30)の性質をもつか、また異なる性質をもつか見て行く。

既に挙げた(6b)=(31a)、(6c)=(32a)は(16a)の正順指定文と同じ形式をもつ。また、これらを(31b)、(32b)のように(16b)の倒置指定文と同じ形式にすると、それぞれ(31a)、(32b)と同じ認知的意味をもつ。ただし、正順指定文ではノ・コトどちらの名詞化辞も許容されるが、倒置指定文ではコトのみが許容される(橋本 1994)。

- (31)a. 優勝する {の／こと} が目的だ。
b. 目的は優勝することだ。

¹⁰ このような言い換えの容認性は語彙項目・文脈によって大きく変わるが、ここではそこに立ち入らない。

¹¹ 西山(2003)は固有名詞であっても次のような場合は非指示的でありうると指摘する。聞き手が「田中さん」によって誰が指示されるか知らない場合である。

(i) (あの人は誰?) あの人は田中さんです。最初からプロジェクトに関わっています。

(32)a. 本屋が多い {の／こと} が特徴だ。

b. 特徴は本屋が多いことだ。

このことから、(31a)(32a)は正順指定文、(31b)(32b)がそれぞれの倒置指定文と考えてよい。「責任者は誰か／誰が責任者か？」という問いに対して「田中さん」と答えるのと同じように「目的は何か／何が目的か?」「特徴は何か／何が特徴か?」という問いに対して、それぞれ「入賞する {の／こと}」「本屋が多い {の／こと}」が答（コト的な内容）となる。モノを指示する名詞と並行的に考えるなら、コト的な内容をもつ名詞は指定文の非指示的名詞句となり、その内容を表すノ節・コト節が指示的名詞句となる。このようにコト的な内容をもつ名詞は非指示的名詞句となり得、また(4a)のように内の関係の関係節による修飾が可能なことから指示的名詞句ともなり得る。

モノを指示する名詞と同様、コト的な内容をもつ名詞でも指定文に現れる非指示的名詞句は指示的名詞句であるパラメーター名詞句をもつ。パラメーター名詞句を明示的に表した場合を例示する。

(33)a. 入賞する {の／こと} が私たちの目的だ。

b. 私たちの目的は入賞することだ。

(34)a. 本屋が多い {の／こと} がこの町の特徴だ。

b. この町の特徴は本屋が多いことだ。

そして、パラメーター名詞句を主題とした同じ意味の文が存在することが指摘されている（野田 1981、菊地 1988）。

(35)a. 私たちは入賞する {の／こと} が目的だ。

b. この町は本屋が多い {の／こと} が特徴だ。

これらに対し、(6a)=(36a)のように「事実」は指定文と同形式の文の述語として現れる。抽象的な概念であっても「事実」「間違い」「誤り」「疑問」などは「いくつかの」「多数の」など数を表す要素による修飾が可能なので数えられるものとして存在し、集合を成すはずである。だとすると「～は～」の形式をもつ(36a-d)の文は(17b)と同様、主語が述部の名詞句が指示する集合に属することを表す文と考えられる¹²。

¹² ただし、(i)-(iv)のように、これらの名詞が個体を指定する指定文の非指示的名詞句（あるいはその主要部）として現れることはありうる。(i)では(36a)と異なり、「という」の共起が必須のように思われるし、(ii)の「間違い」は(36b)が将来・現在の行動について述べているのに対し過去の行動について述べている、など検討すべき点があるが本稿では立ち入らない。

- (36)a. 症状が悪化した {の／こと} は事実だ。
b. 今撤退する {の／こと} は {間違い／誤り} だ。
c. これを孔子の作とする {の／こと} は疑問だ。
d. 不況がたった一つの原因であるように報道されるのは問題だ。

これらが指定文であれば当然のことだが、「～が～」形式の文への言い換えはできない。

- (37)a. ×事実が {あの噂だ／彼が反省していることだ}。
b. × {間違い／誤り} が今撤退することだ。
c. ×疑問がこれを孔子の作とすることだ。
d. ×問題が不況がたった一つの原因であるように報道されることだ。

そして、「疑問」「問題」のようなものは(38)のように程度の修飾が可能なので、コト的な内容をもつ名詞も変化を起こしている。ただし、モノを指示する名詞のように性質・属性を表すのではなく、コト的な内容に対する人間の評価を表す。

- (38)a. これを孔子の作とする {の／こと} は非常に疑問だ。
b. 不況がたった一つの原因であるように報道されるのは相当問題だ。

3.2 モノを指示する名詞との相違点

3.2.1 モダリティの意味への変化

本節ではある種の意味をもつコト的な内容をもつ名詞はモダリティの意味をもつ要素へと変化することを指摘する。

「コツ」「ポイント」などは「目的」「特徴」と同じようにパラメーター名詞句を伴って指定文を形成する。

- (39)a. 天ぷらのコツは水を冷やしておくことだ。
b. 水を冷やしておく {の／こと} が天ぷらのコツだ。

-
- (i)彼らがまだ戻っていないというのが私の知る唯一の事実だ。／私の知る唯一の事実は、彼らがまだ戻っていないということだ。
(ii)あの時撤退した {の／こと} が彼らの間違いだ。／彼らの間違いはあの時撤退したことだ。
(iii)なぜ彼女が姿を消したのかが唯一の疑問だ。／唯一の疑問はなぜ彼女が姿を消したかだ。
(iv)不況がたった一つの原因であるように報道されるのが最大の問題だ。／最大の問題は不況がたった一つの原因であるように報道されることだ。

(40)a. この料理のポイントは野菜をじっくり炒めることだ。

b. 野菜をじっくり炒める {の／こと} がこの料理のポイントだ。

そして「目的」「特徴」などと同じようにパラメーター名詞句を主題とした文が可能である。

(41)a. 天ぷらは水を冷やしておく {の／こと} がコツだ。

b. この料理は野菜をじっくり炒める {の／こと} がポイントだ。

しかし、(42a-b)の文も可能である。これらは「水」「野菜」をそれぞれ主題としているが、「天ぷらを作る」「ある料理を作る」というようなより大きな主題をもつ談話の中で起こる。

(42)a. 水は冷やしておく {の／こと} がコツだ。

b. 野菜はじっくり炒める {の／こと} がポイントだ。

これらは(29)のような派生とは考えられない。そうであれば(43)の文からの派生であるはずだがこれらの容認性は低い。別の言い方をすると、「水」が「コツ」のパラメーター名詞句となったり「野菜」が「ポイント」のパラメーター名詞句となることはない。「コツ」「ポイント」は何らかの作業において定義されるものだからである¹³。

(43)a. ×冷やしておく {の／こと} が水のコツだ。

b. ×じっくり炒める {の／こと} が野菜のポイントだ。

(42)の文の意味は以下のようなものに近い。

(44)a. [水は冷やしておく] {のがいい／べきだ}。

b. [野菜はじっくり炒める] {のがいい／べきだ}。

だとすると、(42)で述語となっているこれらの語彙項目はこの文型では義務的モダリティの意味をもっていることになる。日本語のモダリティ形式は文末に現れる。そして指示的名詞句は指示という機能をもつ以上他の品詞の機能をもつことはないが、非指示

¹³ 次のような「ポイント」は作業ではなくモノについて定義されるもので、後述の意味の変化を起こさない。

(i) トートバッグとスカーフをチェック柄で合わせたのがポイント。(石田晴久ほか『新しい技術・家庭 家庭篇』)

的名詞句にはそのような変化が可能であり、非指示的名詞句が述語（文末）に現れる正順指定文でこのような意味の変化が起こると考えられる。

「コツ」「ポイント」は指示的にも用いることができるが、語彙項目の中には指示的に用いることが難しく、もっぱら正順指定文と同形式の文の述語として現れるものがある¹⁴。「急務」「得策」は指示的にはほぼ用いられず、(45a-b)のような形式で(47a-b)のような義務的モダリティの意味をもっている。

- (45)a. 遅れを解消する {の／こと} が急務だ。
b. 向こうと手を組むのが得策だ。
(46)a. ?急務は遅れを解消することだ。
b. ?得策は向こうと手を組むことだ。
(47)a. [遅れを解消する] {のが望ましい／べきだ}。
b. [向こうと手を組む] {のが望ましい／べきだ}。

このモダリティ的意味への変化を図示すると次のようになる。(48a)のような指定文において非指示的名詞句のパラメーター名詞句が主題と解釈され、(48b)のように形式の上でも主題となる。すると二重下線部の部分がモダリティ的意味をもつ（つまり命題に含まれない）と解釈され、(48c)のような文が生じる。

- (48)a. aが[bのc]だ。例：水を冷やしておくのが天ぷらのコツだ。
b. [bはa] がcだ。例：天ぷらは水を冷やしておくのがコツだ。
c. [b'はa] がcだ。例：水は冷やしておくのがコツだ。

「原則」「基本」「常識」「筋」「正解」「マナー」「理想」「礼儀」「エチケット」も同様に義務的モダリティへの意味変化をしている。

- (49)a. 切り込みは薄く広く作るのが原則。(『炎芸術』出版部 『ろくろがいらぬ陶芸』)
b. 上下に岐れた枝は、上枝を切り、下枝を残すのが基本。(米谷寿洋『雑木盆栽専科』)
c. 試着はセール前の下見ですませしておくのが常識。(『with』)
d. こういう報告は、大臣か次官からのチャンネルを通すのが筋ですから (落合信彦『崩壊』)
e. 皿は重ねずに、立てて、シンク下などに収納するのが正解だ。(平成暮らしの研究会『家事そんなやり方じゃダメダメ!』)

¹⁴ 杉浦(2017)ではこのようなものを述部にのみ現れるという特徴をもつ品詞、非定型述詞として認めるべきだと主張した。

- f. 懐石は出されたらすぐいただくのがマナーですが、(千玄室『なんて美しい女性だろう!』)
- g. コンクリートは練り混ぜてから二時間以内に打ち込むのが理想だ。(長谷川裕『欠陥マンションの作り方』)
- h. 出典は明記するのが礼儀と思うので (Yahoo!ブログ)
- i. 悲しい顔をしている人は、そっと放っておくのがエチケットですから (宝彩有菜『人生が楽しくなるちょっとした考え方』)

3.2.2 文副詞的意味への変化

副詞には述部を修飾するものと文を修飾するものがあり、後者は文副詞と呼ばれる。日本語では(50)のような文副詞が見られる。

- (50)a. {正直／ぶっちゃけ} 行きたくない。
- b. 原則職員が立ち会う。

そして、述語として現れ、同じような文副詞的な意味をもつ語彙項目も見られる。「心情」「本心」「本音」などを述語にもち、形式的には正順指定文と同じ文が見られるが、非指示的名詞句を主語とした倒置指定文(52a-c)が成立しないので指定文ではない。

- (51)a. こうなるとやっぱり使いたくなるのが心情ってもの。(蔭山敬吾『芸能界デビュー』)
- b. ころげまわって泣き叫びたいのが本心でした。(『チョッちゃんが行くわよ』黒柳朝)
- c. 格闘技ファンなら試合をオンタイムで見たいのが本音。(TELE PAL 2001年12月8日号)
- (52)a. ×心情は使いたくなることだ。
- b. ×本心はころげまわって泣き叫びたいことだ。
- c. ×本音は試合をオンタイムで見たいことだ。

言い換えるとすれば次のような文に近い。つまり(51a-c)は形式面ではノ節は主節の構成要素だが、意味の面からは主節であり、述語の語彙項目は文副詞の機能をもつ。ただし、(53a-c)より(51a-c)の方が主観性が強く感じられる。

- (53)a. {心情的には／心情としては} 使いたくなる。
- b. 本心ではころげまわって泣き叫びたい。
- c. 本音を言うと試合をオンタイムで見たい。

同じように(50b)にも同じ意味をもつ(54a)の文がある。(54a)は形式的には正順指定文だが、(54b)の倒置指定文が成立しないので指定文ではない。

- (54)a. 職員が立ち会うのが原則だ。
b. ×原則は職員が立ち会うことだ。

「習慣」のような語彙項目が述語に現れる(55a)は形式面では正順指定文と同じだが、倒置指定文(55b)は許容されず、意味の上でもそれがただひとつの習慣であることを意味しない。(55a)の文を言い換えるとしたら(55c)のようになるので、(55a)の「習慣」も文副詞的な意味をもつと言ってよい。

- (55)a. 朝はバナナと牛乳をガーッとジューサーでジュースにし飲むのが習慣です。
(Yahoo!ブログ 2008)
b. ?習慣はバナナと牛乳をガーッとジューサーでジュースにし飲むことです。
c. 習慣として朝はバナナと牛乳をガーッとジューサーでジュースにし飲みます。

これらの変化を図示すると、形式の上では(56a)のように正順指定文だが、意味の上では(56b)のように指定文の非指示的名詞句にあたる節が主節となっていて、下線部が文副詞の意味をもっている。

- (56)a. a が b だ。
b. [a] が b だ。

「通例」「常」も同じように文副詞的な意味をもつ。

- (57)a. SIS の部長は外務省の次官補から選ばれるのが通例だ。(中島渉『サザンクロス流れて』)
b. 駅の乗降人数は乗車、降車ともほぼ同数なのが常であるが、(高山禮蔵『関西電車のある風景今昔』)

3.2.3 感情を表す形容詞への変化

形式の上で名詞述語文だが指定文でも措定文でもないもうひとつのタイプがある。述語に現れる名詞が感情を表し、ノ節・コト節が感情の対象となる事態である、(58a-b)のようなタイプである。

- (58)a. 気の合わない人と同席する {の／こと} は苦痛だ。

- b. 雪原を疾走するのは快感だ。

形式としては倒置指定文、そして措定文と同形であるが、倒置指定文であればノ節・コト節は述語に現れるはずなので倒置指定文ではなく、例えば「苦痛であること」が「気の合わない人と同席すること」の属性・性質とは言えないので措定文でもない。意味の上では次のような形容詞と同じとみなせる。

- (59)a. 気の合わない人と同席する {の／こと} はつらい。

- b. 雪原を疾走するのは楽しい。

感情・感覚を表す形容詞は(59)のように「は」と共起する場合と(60)のように「が」と共起する場合で意味の違いがある。前者は概ね一般的にあるもの・事態が人に生じさせる感情・感覚を表し、後者は個人が特定の文脈で経験する感情・感覚を表す。

- (60)a. 気の合わない人と同席する {の／こと} がつらい。

- b. 雪原を疾走するのが楽しい。

(58)と(61)においても同じ違いがある。

- (61)a. 気の合わない人と同席する {の／こと} が苦痛だ。

- b. 雪原を疾走するのが快感だ。

また、日本語の感情・感覚を表す形容詞は三人称に用いる場合伝聞や推量の形式を必要とするが、(58a-b)についても同じである。

- (62)a. 彼女は気の合わない人と同席するのがつらい {そうだ／らしい／のだ}。

- b. 彼は雪原を疾走するのが楽しい {そうだ／らしい／のだ}。

- (63)a. 彼女は気の合わない人と同席するのが苦痛 {だそうだ／らしい／なのだ}。

- b. 彼は雪原を疾走するのが快感 {だそうだ／らしい／なのだ}。

程度の修飾が可能であることから形容詞へと変化していることが見てとれる。

- (64)a. 気の合わない人と同席する {の／こと} は非常に苦痛だ。

- b. 雪原を疾走するのは本当に快感だ。

そして形容詞と同様名詞修飾をする場合もある。

- (65)a. つらい時間
b. 苦痛な時間

これらのことから、コト的な内容をもつ名詞が感情・感覚を表す形容詞へと変化していると考えられる。

4. 結び

本稿では日本語のモノを指示する名詞とコト的な内容をもつ名詞の名詞述語文における振る舞いを比較し、コト的な内容をもつ名詞が次のような変化を起こすことを見た。

- (66)a. 指定文において(23)の形式の変化を起こし、「～が[名詞]」という形式がモダリティの意味、そして文副詞的意味をもつ。これは文の他の部分がそれぞれ命題、そして主節として再分析されているということである。
b. 感情を表す名詞が感情を表す形容詞への変化を起こす。

最後に指定文と倒置指定文の表現効果に言及したい。(67a)(67b)は認知的意味としては同じだが読者に与える印象は異なる。(67b)が整った文章であるのに対し、(67a)は明るくカジュアルな文章となっている。(67a)の例文は『JJ』という20代女性をターゲットとするファッション雑誌の用例だが、BCCWJのデータではこの雑誌には「～がポイント」という形の文が19例あるのに対し、「ポイントは～」という形の文は2例であった。(51a-c)と(53a-c)においても前者の方がより主観性が強く感じられた。ノ節・コト節が形式的には文の主語だが意味の上では主節に近いという複層の構造がダイナミックさや動きを感じさせるのかもしれない。

- (67)a. スカートのボリューム感に負けない、少しディテールのある靴を選ぶのがポイント。(『JJ』2005)
b. ポイントはスカートのボリューム感に負けない、少しディテールのある靴を選ぶこと。

参考文献

- 秋本瞳(2013)『節を名詞化する「の」「こと」の使い分けに関わる要因 —BCCWJを用いて—』麗澤大学大学院平成24年度博士論文
大場美穂子(2016)「補文標識『という』に関する一考察」『日本語と日本語教育』44 1-19 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
上林洋二(1988)「措定文と指定文——ハとガの一面」『文芸言語研究 言語篇』14:57-74. 筑

波大学文藝・言語学系

菊地康人(1988)『『カキ料理は広島が本場だ』構文の成立条件』『広島大学日本語教育学科紀要』7 p.89-107.

杉浦滋子(2017)「日本語の非定型述詞」日本語学会 2017 年度秋季大会発表

寺村秀夫(1992)「連体修飾のシンタクスと意味 —その 3—」『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』(初出 1977 『日本語・日本文化』6号、大阪外国語大学留学生別科)

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房

野田尚史(1981)「『カキ料理は広島が本場だ』構文について」『待兼山論叢 日本学篇』15 p.45-66.

橋本修(1994)「『の』補文の統語的・意味的性質」筑波大学文藝言語研究言語篇 25 pp.153-166.

村木新次郎(2005)「『神戸な人』という言い方とその周辺」中村明他編『表現と文体』明治書院

——(2019)『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房

Declerck, R. (1991) *Studies on copular sentences, clefts and pseudo-clefts*. Leuven University Press.

Donnellan, K. (1966) "Reference and definite description". *Philosophical Review* 75:271-304.

Higgins, F. R. (1979) *The pseudo-cleft construction in English*. Garland.